

実験動物の技術と応用 実践編 増補改訂版（第三刷）にあたっての訂正点

訂正箇所	訂正前（初版、第二刷）	訂正後（第三刷）
p. 147 右欄、タイトルの脱字 訂正	「作業別腰痛予防対」	「作業別腰痛予防 <u>策</u> 」
p. 175 右欄、「表 10-24 微生物モニタリングの検査法と主な対象微生物」の対象微生物のカテゴリー分類の訂正	<i>Citrobacter rodentium</i> <u>(B/C)</u> <i>Pasteurella pneumotropica</i> ※ <u>(C)</u> <i>Pseudomonas aeruginosa</i> <u>(D/E)</u> <i>Staphylococcus aureus</i> <u>(D/E)</u>	<i>Citrobacter rodentium</i> <u>(C)</u> <i>Pasteurella pneumotropica</i> ※ <u>(D)</u> <i>Pseudomonas aeruginosa</i> <u>(D)</u> <i>Staphylococcus aureus</i> <u>(D)</u>
p. 225 「2) 系統の特徴」の上から 1 行目の誤字訂正	「リンパ <u>系</u> 白血病～」	「リンパ <u>性</u> 白血病～」
p. 266 「2. 骨格系」の項、上から 1 行目	「骨の数は <u>生体</u> で 256～261 個であるが、～」	「骨の数は <u>成体</u> で 256～261 個であるが、～」
p. 275 右欄、「シリアンハムスターの感染実験」の項、ウイルスの名称の訂正	「～ (SARS <u>Cov</u> -2) ～」	「～ (SARS <u>CoV</u> -2) ～」
p. 288 ② 実験動物としての特性と使用分野の項 上から 7 行目及び右欄の項目名及び説明文中の試験法の名称修正 (試験法の名称が変更されたため)	「 <u>生殖・発生毒性試験</u> 」	「 <u>生殖発生毒性試験</u> 」
p. 307 右欄、「表 6-4 臨床症状の観察ポイント」の 3. その他の項（誤字訂正）	・ 体重、 <u>体重</u> 、心拍数、呼吸数	・ 体重、 <u>体温</u> 、心拍数、呼吸数

（次頁に続く）

「表 6-5 イヌの人獣共通感染症」
(誤)

表 6-5 イヌの人獣共通感染症

分類	病名	病原体名	症状	
			イヌ	ヒト
ウイルス性疾患	狂犬病	Rabies virus	発熱、元気消失、性格・行動の変化、徘徊・不眠、鳴き声の変化、噛みつき、流涎、意識低下、呼吸麻痺	不安、興奮、錯乱
細菌性疾患	レプトスピラ症	<i>Leptospira interrogans</i>	発熱、元気消失、黄疸、血尿・血便	発熱、悪寒、頭痛・筋肉痛、黄疸
	ブルセラ症	<i>Brucella Canis</i>	雄：精巣炎・前立腺炎 雌：流産、死産	発熱、筋肉痛
	パスツレラ症	<i>Pasteurella multocida</i>	ほとんど無症状	受傷部位の発赤・腫脹、リンパ節腫大、蜂窩織炎、敗血症
	皮膚糸状菌症	<i>Microsporum canis</i> など	鱗屑、発赤・発疹、円形脱毛	鱗屑、発疹、痒み、白癬疹
寄生虫性疾患	イヌ糸状虫症	<i>Dirofilaria immitis</i>	発咳、削瘦、被毛粗造、浅速呼吸、腹部膨満（腹水貯留）、血尿	リンパ管炎、リンパ節炎、象皮病
	多包条虫症	<i>Echinococcus multilocularis</i>	ほとんど無症状	上腹部膨満・不快感、発熱、黄疸



(正: 訂正部位赤字)

表 6-5 イヌの人獣共通感染症

分類	病名	病原体名	症状	
			イヌ	ヒト
ウイルス性疾患	狂犬病	Rabies virus	発熱、元気消失、性格・行動の変化、徘徊・不眠、鳴き声の変化、 咬 みつき、流涎、意識低下、呼吸麻痺	不安、興奮、錯乱
細菌性疾患	レプトスピラ症	<i>Leptospira interrogans</i>	発熱、元気消失、黄疸、血尿・血便	発熱、悪寒、頭痛・筋肉痛、黄疸
	ブルセラ症	<i>Brucella canis</i>	雄：精巣炎・前立腺炎 雌：流産、死産	発熱、筋肉痛
	パスツレラ症	<i>Pasteurella multocida</i>	ほとんど無症状	受傷部位の発赤・腫脹、リンパ節腫大、 蜂 窩織炎、敗血症
真菌性疾患	皮膚糸状菌症	<i>Microsporum canis</i> など	鱗屑、発赤・発疹、円形脱毛	鱗屑、発疹、痒み、白癬疹
寄生虫性疾患	イヌ糸状虫症	<i>Dirofilaria immitis</i>	発咳、削瘦、被毛粗造、浅速呼吸、腹部膨満（腹水貯留）、血尿	リンパ管炎、リンパ節炎、象皮病
	多包条虫症	<i>Echinococcus multilocularis</i>	ほとんど無症状	上腹部膨満・不快感、発熱、黄疸

訂正・追加箇所	訂正前（第一、二刷）	訂正後（第三刷）
p. 312 「4. 麻酔、(1) 麻酔法」の項、上から2～4行目（一部削除と追記）	「～、プロポフォール、アルファキサロンやメデトミジン+ミダゾラム+ブトルファノール三種混合麻酔薬（MMB）等がある。ケタミンは麻薬であるが、キシラジンやメデトミジン等を併用する～」	「～、プロポフォール、アルファキサロン等がある。ケタミンは麻薬であるが、キシラジンやメデトミジン等の鎮静薬を併用する～」

(次頁に続く)

「表 7-6 ネコの人獣共通感染症」
(誤)

表 7-6 ネコの人獣共通感染症

分類	病名	病原体名	症状	
			ネコ	ヒト
細菌性疾患	ネコひっかき病	<i>Bartonella henselae</i>	ほとんど無症状	咬まれたり、 引っ掻かれた部位の発赤
	パスツレラ症	<i>Pasteurella multocida</i>	ほとんど無症状	隆起、化膿性痂皮、 リンパ節腫大
	皮膚糸状菌症	<i>Microsporum canis</i> など	鱗屑、発赤・発疹、円形脱毛	鱗屑、発疹、痒み、白癬疹
寄生虫性疾患	トキソ プラズマ病	<i>Toxoplasma gondii</i>	幼猫：下痢、神経症状、肺炎 成猫：ほとんど無症状	妊婦が初感染を受けた場合、 先天性トキソプラズマ症状 (胎内死亡、流産、網脈絡膜炎、 水頭症など)の発症
	回虫症	<i>Toxocara cati</i>	幼猫：嘔吐・下痢、被毛粗造、 体重低下 成猫：ほとんど無症状	内臓幼虫移行症、 眼幼虫移行症
	疥癬症	<i>Notoedres cati</i>	黒い耳垢、激しい痒み、 皮膚炎	湿疹、痒み、皮膚炎



(正: 訂正部位赤字)

表 7-6 ネコの人獣共通感染症

分類	病名	病原体名	症状	
			ネコ	ヒト
細菌性疾患	ネコひっかき病	<i>Bartonella henselae</i>	ほとんど無症状	咬まれたり、 引っ掻かれた部位の発赤
	パスツレラ症	<i>Pasteurella multocida</i>	ほとんど無症状	隆起、化膿性痂皮、 リンパ節腫大
真菌性疾患	皮膚糸状菌症	<i>Microsporum canis</i> など	鱗屑、発赤・発疹、円形脱毛	鱗屑、発疹、痒み、白癬疹
寄生虫性疾患	トキソプラズマ病	<i>Toxoplasma gondii</i>	幼猫：下痢、神経症状、肺炎 成猫：ほとんど無症状	妊婦が初感染を受けた場合、 先天性トキソプラズマ症状 (胎内死亡、流産、網脈絡膜炎、 水頭症など)の発症
	回虫症	<i>Toxocara cati</i>	幼猫：嘔吐・下痢、被毛粗造、 体重低下 成猫：ほとんど無症状	内臓幼虫移行症、 眼幼虫移行症
	疥癬症	<i>Notoedres cati</i>	黒い耳垢、激しい痒み、 皮膚炎	皮疹、痒み、皮膚炎

(次頁に続く)

訂正・追加箇所	訂正前（初版、第二刷）	訂正後（第三刷）
p. 322 「5. 麻酔法」の 項、上から 4～5 行 目（一部削除と追 記）	「ネコの全身麻酔に汎用される注 射麻酔薬にはチオペンタールナト リウム、塩酸ケタミン、 <u>メデトミ ジン</u> 、 <u>ミダゾラム</u> 、 <u>プロポフォール</u> 等がある。ケタミンは麻薬指定 されているが、メデトミジンやミ ダゾラム等を併用する～」	「ネコの全身麻酔に汎用される注 射麻酔薬にはチオペンタールナト リウム、塩酸ケタミン、プロポフ オール等がある。ケタミンは麻薬 指定されているが、メデトミジン やミダゾラム等の <u>鎮静薬</u> を併用す る～」
p. 322 表 7-10 ネコの主 な注射麻酔薬の脚 注 (スペルミス)	「Laboratory Animal Anaesthesia 4th ed., P. <u>Fleckell</u> , 2016 の Table 5.15 から一部抜粋して掲 載」	「Laboratory Animal Anaesthesia 4th ed., P. <u>Flecknell</u> , 2016 の Table 5.15 から一部抜粋して掲 載」
p. 329 「表 8-7 その他の 感染症」 ブタマイコプラズ マ肺炎の病原体名 の欄	「 <u>Mycoplasma hyopneumoniae</u> 」	「 <u>Mycoplasma hyopneumoniaes</u> 」
p. 329 「表 8-7 その他の 感染症」 病名の欄	「 <u>グレーザー病</u> 」	「 <u>グレーサー病</u> 」
p. 329 「表 8-7 その他の 感染症」 グレーザー病の病 原体名の欄	「 <u>Hemophilus parasuis</u> 」	「 <u>Haemophilus parasuis</u> 」
p. 329 「表 8-7 その他の 感染症」 豚肺虫症の病原体 名の欄	「 <u>Metastrongylus apye</u> 」	「 <u>Metastrongylus elongatus</u> 」
p. 329 「表 8-7 その他の 感染症」 クリプトスポリジ ウム症の病原体名 の欄	「 <u>Cryptosporidium parvum</u> 」	「 <u>Cryptosporidium parvum</u> 」
p. 332 「3) 鉄剤の投与」 の項、最終行	「ミニブタも <u>同様である</u> 」	「ミニブタも徐々に貧血状態に なるため、鉄剤の投与を行うこ とがある。」
p. 338 表 9-3 マカク属サ ル類の歯式 表の欄外の「歯 式」の訂正	「歯式: I2/2, C1/1, <u>P3/3, M2/2</u> 」	「歯式: I2/2, C1/1, <u>P2/2, M3/3</u> 」

(次頁に続く)

訂正・追加箇所	訂正前（初版、第二刷）	訂正後（第三刷）
p. 346 右欄、「子の発育」 誤記載（記載欄の誤り）の訂正	<u>性皮や子宮頸管粘膜の性状を観察する方法のほか、尿中のエストロジェンや血中の黄体形成ホルモン（LH）やプロゲステロンを測る方法、個体ごとの月経周期から推定した排卵時期を基準とする方法、膣垢像の観察、卵巢の触診、体温測定等の結果から推測する方法がある。</u>	<u>出生子の体重は、カニクイザルで 300～350g、アカゲザルで 470～500g、ニホンザルで 500～550g 程度である。新生子は、被毛で覆われ、出生当日から母親にしがみついて乳を吸う。臍帯は、普通生後 3 日以内に脱落する。生後 1 週間以内に一時的な体重減少があるが、約 2.5 か月齢で出生時体重のほぼ 2 倍となり 12 か月齢はおおよそ 5 倍の体重になる。</u>
p. 365 「1. 感染性疾患」の項 上から 1～12 行目 （家畜伝染病予防法の表記に修正する）	「多くの感染症が知られており（表 10-2）、とくに発生時の被害が深刻な 5 つの疾病（ <u>家禽コレラ、高病原性・低病原性鳥インフルエンザ、ニューカッスル病、家禽サルモネラ症</u> 〔 <u>雛白痢と家禽チフス</u> 〕が家畜伝染病予防法における <u>監視伝染病</u> に、発生状況を報告すべき 12 疾病（ <u>鶏痘、低病原性ニューカッスル病、マレック病、鶏伝染性気管支炎、鶏伝染性喉頭気管炎、伝染性ファブリシウス嚢病、鶏白血病、鳥結核、鶏マイコプラズマ症、ロイコチトゾーン病、家禽サルモネラ症、鳥インフルエンザ</u> ）が届出伝染病に指定されている。主な細菌感染症には <u>雛白痢、伝染性コリーザ、マイコプラズマ症、家禽サルモネラ症</u> 、ウイルス性疾患には <u>鶏痘、ニューカッスル病、鶏伝染性喉頭気管炎、鶏伝染性気管支炎、鶏脳脊髄炎、マレック病、鶏白血病、伝染性ファブリシウス嚢病、鳥インフルエンザ、原虫感染症にはコクシジウム症、ロイコチトゾーン病</u> がある。」	「多くの感染症が知られており（表 10-2）、とくに発生時の被害が深刻な 5 つの疾病（ <u>家きんコレラ、高病原性鳥インフルエンザ、低病原性鳥インフルエンザ、ニューカッスル病</u> 〔 <u>農林水産省令で定めるものに限る</u> 〕、 <u>家きんサルモネラ症</u> 〔 <u>雛白痢と家きんチフス</u> 〕が家畜伝染病予防法における <u>家畜伝染病</u> に、発生状況を報告すべき 12 疾病（ <u>鶏痘、低病原性ニューカッスル病、マレック病、鶏伝染性気管支炎、鶏伝染性喉頭気管炎、伝染性ファブリシウス嚢病、鶏白血病、鳥結核、鳥マイコプラズマ症、ロイコチトゾーン症、サルモネラ症</u> 〔 <u>特定のものに限る</u> 〕、 <u>鳥インフルエンザ</u> ）が届出伝染病に指定されている。主な細菌感染症には <u>伝染性コリーザ、鳥マイコプラズマ症、家きんサルモネラ症</u> 、ウイルス性疾患には <u>鶏痘、ニューカッスル病、鶏伝染性喉頭気管炎、鶏伝染性気管支炎、鶏脳脊髄炎、マレック病、鶏白血病、伝染性ファブリシウス嚢病、鳥インフルエンザ、原虫感染症にはコクシジウム症、ロイコチトゾーン症</u> がある。」
p. 371 表 11-2 麻酔段階とその行動的特徴 「魚の状態」の欄 （誤字訂正）	「 <u>軽度沈静</u> 」 「 <u>重度沈静</u> 」	「 <u>軽度鎮静</u> 」 「 <u>重度鎮静</u> 」

（次頁に続く）

訂正・追加箇所	訂正前（初版、第二刷）	訂正後（第三刷）
p. 375 「1. ショウジョウバエ、(1) 実験動物としての一般的特性ならびに使用分野」の項、13～14行目 (学名の訂正)	「～キハダショウジョウバエ (<i>D. <u>melanogaster</u></i>) 、～」	「～キハダショウジョウバエ (<i>D. <u>lutescens</u></i>) 、～」
索引 p. 386	<u>家禽</u> コレラ 365 <u>家禽</u> サルモネラ感染症 365 <u>家禽</u> チフス 356	<u>家きん</u> コレラ 365 <u>家きん</u> サルモネラ感染症 365 <u>家きん</u> チフス 356
p. 389	三種混合麻酔薬 246	三種混合麻酔薬 <u>205</u> 、 <u>246</u> 、 <u>262</u>
p. 390	生殖・発生毒性試験 288	生殖発生毒性試験 288
p. 395	ロイコチトゾーン <u>病</u> 365	ロイコチトゾーン <u>症</u> 365

下記の通り、記載内容に一部誤りがありましたので訂正いたします。

訂正・追加箇所	誤	正
p. 10、308、319、344 及び 388 IATA(International Air Transport Association)の日本 名の統一	「国際航空輸送協会」	「国際航空運送協会」
p. 41 1. 口腔の項 上から 10 行目 (記述内容の適正 化)	「口腔には、耳下腺、下顎腺、舌 下腺という～」	「口腔周囲には、耳下腺、下顎 腺、舌下腺という～」
p. 49 (3) 前立腺の項 (記述内容の適正 化)	「膀胱の下にあり、精管はこの前 立腺の中で尿道に開口する。精液 成分の大部分を分泌する。」	「膀胱の下にあり、精管はこの前 立腺の中で尿道に開口する。精液 成分を分泌する。」
p. 49 (4) 精囊の項 (記述内容の適正 化)	「精管が尿道に入る直前の部分か ら飛び出している袋状の器官であ る。精液成分の一部を分泌す る。」	「精管が尿道に入る直前の部分か ら飛び出している袋状の器官であ る。精液成分を分泌する。」
p. 81 右欄 「トランスジーンの 表記例」の項 (スペルミス)	Tg (Zfp38) D1Htz マウスの Zfp38 遺伝子を含むトラ ンスジーンで、 <u>Nathaniel Heints</u> (Htz) が報告した D1 系 (D1)	Tg (Zfp38) D1Htz マウスの Zfp38 遺伝子を含むトラ ンスジーンで、 <u>Nathaniel Heintz</u> (Htz) が報告した D1 系 (D1)
p. 85 2. 生殖腺の性決定要 因の項 上から 3 行目 (脱字)	「～さらに <i>Sry</i> 遺伝によって～」	「～さらに <i>Sry</i> 遺伝子によって ～」
p. 85 3. 生殖腺と副生殖器 の発生の項 上から 12 行目と 19 行目 (2 か所) (脱字)	「胎齢 13 目頃から～」	「胎齢 13 日目頃から～」
p. 96 右欄 「オキシトシン」の 項 (用語の統一)	「 <u>バゾプレッシン</u> 」	「 <u>バソプレシン</u> 」
p. 234 表 1-3 マウスの血液 学的検査値 白血球 (WBC) の単 位欄	$\times 10^2/\text{mm}^3$	$\times 10^2/\text{mm}^3$

(次頁に続く)

訂正・追加箇所	誤	正
p. 259 4. 妊娠の項 上から 3 行目 (用語の適正化)	「妊娠 6～7 日目に <u>受精卵</u> は子宮に着床する。」	「妊娠 6～7 日目に <u>受精卵 (胚)</u> は子宮に着床する。」
p. 259 右欄 「偽妊娠」の項 上から 3～4 行目 (用語の適正化)	「この時に <u>受精胚</u> を移植すると、～」	「この時に <u>胚</u> を移植すると、～」
p. 259 5. 胎子の発育の項 上から 3～8 行目 (用語及び記述内容の適正化)	「～、交尾後約 24 時間で卵割が始まる。卵割は 2 細胞期、4 細胞期、8 細胞期と進み、16 細胞期以上の桑実期に達するのは受精後約 60 時間である。 <u>卵</u> はこの時期まで卵管にあるが、胎齢 4 日には子宮に降りて、胞胚期に進む。この時期には、 <u>卵</u> は一層の栄養外胚葉細胞に囲まれ、中に内腔 (胚胞腔) が生じ、その一部に細胞塊が見られる (この時期以降、 <u>卵</u> は <u>胚 [embryo]</u> とよばれる)。」	「～、交尾後約 24 時間で卵割が始まり、これ以降は <u>胚 [embryo]</u> とよばれる。卵割は 2 細胞期、4 細胞期、8 細胞期と進み、16 細胞期以上の桑実期に達するのは受精後約 72 時間である。 <u>胚</u> はこの時期まで卵管にあるが、胎齢 4 日には子宮に降りて、胞胚期に進む。この時期には、 <u>胚</u> は一層の栄養外胚葉細胞に囲まれ、中に内腔 (胚胞腔) が生じ、その一部に細胞塊が見られる。」
p. 308 表 6-6 イヌの主な感染症 「イヌ糸状虫症」の「観察ポイント・症状」の欄 (記述内容の適正化)	「 <u>幼犬：嘔吐、下痢、元気消失、食欲低下</u> <u>成犬：ほぼ無症状</u> 」	「 <u>発咳、元気消失、呼吸困難、食欲低下、腹部膨満 (腹水貯留)、血尿</u> 」
p. 319 表 7-7 ネコの主な感染症 ネコカリシウイルス感染症の病原体名 (スペルミス)	「Feline <u>calcivirus</u> 」	「Feline <u>calicivirus</u> 」
p. 319 表 7-7 ネコの主な感染症 ネコ白血病の病原体名 (スペルミス)	「Feline <u>leulemia</u> virus」	「Feline <u>leukemia</u> virus」
p. 319 表 7-7 ネコの主な感染症 猫条虫の病原体名 (スペルミス)	「Taenia <u>taeniaeormis</u> 」	「Taenia <u>taeniaeformis</u> 」

(次頁に続く)

訂正・追加箇所	誤	正
p. 319 表 7-7 ネコの主な 感染症 瓜実条虫の病原体名 (スperlミス)	「 <u>Dipyliduum</u> caninum」	「 <u>Dipylidium</u> caninum」
p. 321 (2) 静脈内投与の項 1 行目 (誤字訂正)	「 <u>撓</u> 側皮静脈」	「 <u>橈</u> 側皮静脈」
p. 324 ① 「はじめに」の項 上から 2 行目 (一般的な学名に修 正)	「イノシシ種 (<i>S. scrofa</i> <u>あるい</u> <u>は</u> <i>S. vittatus</i>) に属し、～」	「イノシシ種 (<i>S. scrofa</i>) に属 し、～」
p. 324 右欄 「生物学的分類」の 項 上から 4～5 行目 (一般的な学名に修 正)	「イノシシ種 : <i>scrofa</i> <u>(ヨーロッパ</u> <u>種)</u> 、 <i>vittatus</i> (アジア種)」	「イノシシ種 : <i>scrofa</i> 」
p. 326 右欄 「歯式」の項 (乳歯の歯式の訂 正)	乳歯 : i1/1, c1/1, p0/0, m0/1= <u>10</u> 永久歯 : I3/3, C1/1, P4/4, M3/3=44	乳歯 : i3/3, c1/1, p3/3=28 永久歯 : I3/3, C1/1, P4/4, M3/3=44
p. 341 右欄 「逸走防止と逸走時 の対応」の項 6 行目	「～、扉を開け <u>る</u> 入室する。」	「～、扉を開け <u>て</u> 入室する。」

202409